

青森ねぶた祭と五所川原立佞武多

副理事長 森林慎介

ねぶたの語源

毎年7月下旬から8月上旬にかけて青森県の40以上の市町村で開催されるねぶた祭りを初めて見に行きました。沿岸地域では「ねぶた」といい、内陸部では「ねぶた」というそうです。意味は一緒で方言の違いだそうです。祭りの始まりは諸説ありますが、忙しい夏の農作業の妨げとなる眠気を追い払う「眠り流し」という行事から生まれ、語源も「眠り流し」から「ねむたながし」「ねむた」「ねぶた」と転訛したのではないかとされています。特に有名なのが、青森市、弘前市、五所川原市の祭りです。今回見たのは、青森市のねぶた祭と五所川原市の立佞武多です。

青森ねぶた祭

青森ねぶたの山車の大きさは、高さ5m・幅9m・奥行7m・重さ4tと大きなものです。

制作費は一台500万円から2,000万円以上掛かると言われ、スポンサーとして大企業(パナソニック、NTTグループ、東北電力、日立、JR、ヤマト運輸、青森銀行等)が名を連ねています。山車と共に祭りを盛り上げるのが跳人(はねと)です。囃子に合わせて掛け声(ラッセラーラッセラー)をかけながら各自が好きなように踊り跳ねます。ラッセラーとは、出せという意味だそうです。跳人にも正装が有り、白を基調とした浴衣とカラフルな腰巻、帯、しごき、たすき、花笠、ががしこ、白足袋、草履です。最近ではスニーカーの跳人の方が多いようです。正装していれば誰でも参加することができます。8月5日(土)と6日(日)は、23台の山車が市内約3.1kmのコースを一周します。運行時間は19:00から21:30までと時間が決まっております。



青森ねぶた



弘前ねぶた



五所川原立佞武多



お囃子



跳人の正装



前ねぶた

ねぶたの運行隊列は、役員団、前ねぶた(小さい物)、跳人、ねぶた、囃子の順になります。今年は四年ぶりに通常開催となり跳人や観客の制限もなく、声出しもOKとのことで大いに盛り上がりました。23台の中から今年のねぶた大賞、知事賞、市長賞、商工会議所会頭賞、観光コンベンション協会会長賞の5作品が選ばれます。最終日には、ねぶた大賞・知事賞・市長賞と海上運行推薦団体の4作品が台船に載せられ青森港をゆっくりと進み、花火大会と共に幕を閉じます。



ねぶた大賞
青森菱友会
牛頭天王
作：竹浪 比呂央



知事賞
JRねぶた実行プロジェクト
強弓 島の為朝
作：竹浪 比呂央



商工会議所会頭賞
青森県板金工業組合
火雷神 菅原 道真
作：北村 春一



観光コンベンション協会会長賞
日立連合ねぶた委員会
新田義貞伝説 龍神へ太刀を捧ぐ
作：北村 蓮明



市長賞
NTTグループねぶた
釈迦降誕
作：北村 春一

五所川原立佞武多

五所川原立佞武多の山車の大きさは、高さ23m・重さ19tもある超巨大なものです。

制作費は2019年に作られた「かぐや」は約1,700万円とのこと。明治中期から大正初期にかけては、高さ約21mのねぶたが町内を練り歩いたといわれております。大正末期から昭和にかけて、電気の普及とともに街中に電線が張り巡らされ、ねぶたの高さが制限され、次第に小型化していきました。太平洋戦争や戦中(昭和19年)戦後(昭和21年)の2度の大火により制作資料のほとんどが焼失し、巨大ねぶたは姿を消していきます。平成8年、巨大ねぶたを作ろうと市民有志が団結し、「立佞武多」と命名し、市民の募金、材料の支援、技術力の提供など沢山の思いが結集され、ついに高さ16mの立佞武多「武者」が復活しました。立佞武多の掛け声(ヤッテマレ、ヤッテマレ)は、標準語でいうと「やっしまえ」という意味になります。五所川原市民の喧嘩っ早い性格が出ています。今年(2023年)は2019年に制作された「かぐや」、2021年に制作された「暫(しばらく)」、そして2023年に制作された「素戔鳴尊(すさのおのみこと)」の3台の立佞武多が登場しました。山車の運行コースは一周1.3kmで、電線は全て地下に埋設されております。運行時間は19:00から20:30までとなります。



かぐや



暫(しばらく)



素戔鳴尊(すさのおのみこと)